

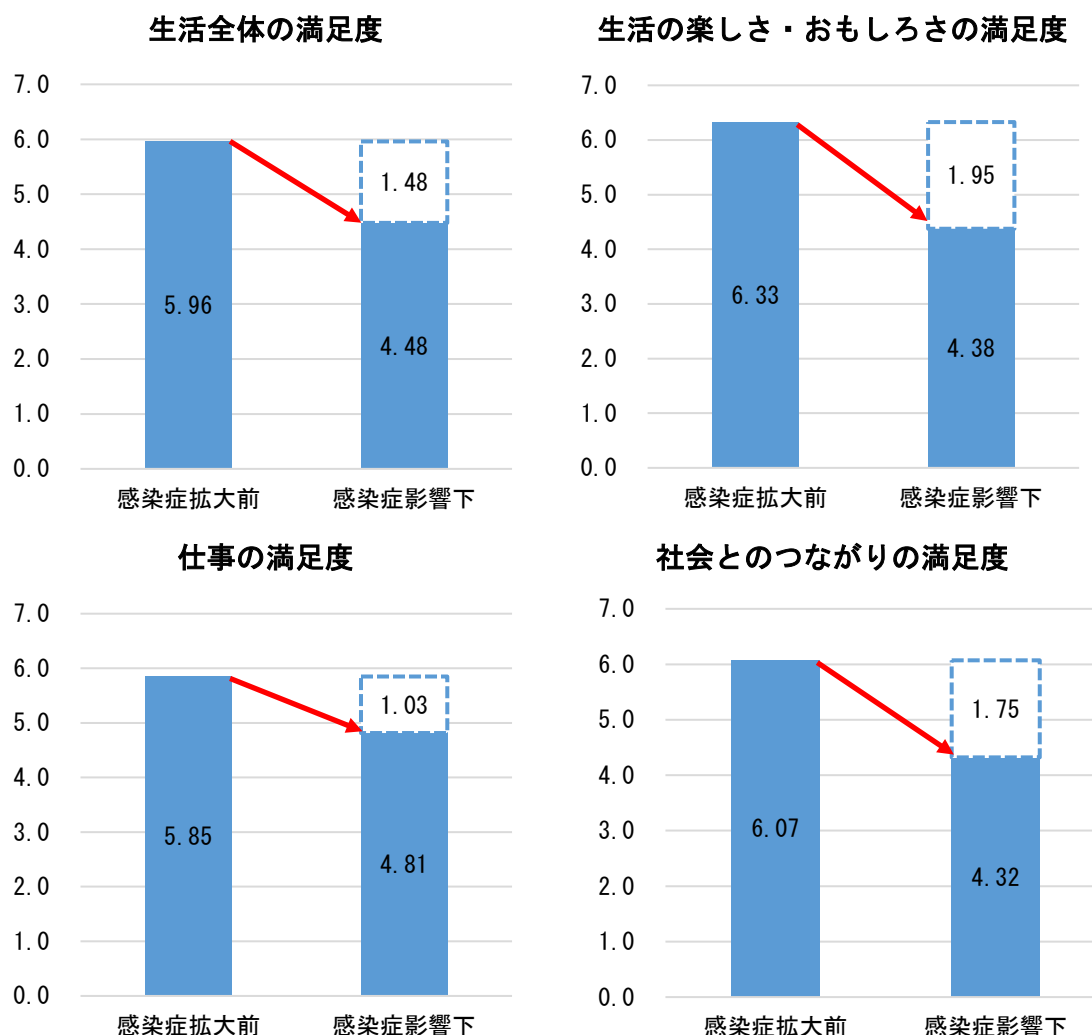
第2章 with コロナの暮らしと満足度

I with コロナの満足度の概観

(生活の楽しさ、社会とのつながりの満足度の低下幅が大きい)

新型コロナウイルス感染症(以下、感染症)の拡大に伴い、人々の生活は大きく変化した。外出の自粛、学校の休校、企業でのテレワーク、各種店舗の短縮営業や休業等、その影響は広範囲にわたった。第2章では、こうした感染症による暮らしの変化に伴う、人々の生活満足度の変化について、内閣府が実施した意識調査¹³に基づいて分析する。

図表2-1-1 満足度の変化



¹³ 内閣府「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」による。同調査は2020年5月25日～6月5日にインターネット調査により実施、全国の15歳以上の登録回答者10,128人から回答を得たもの。

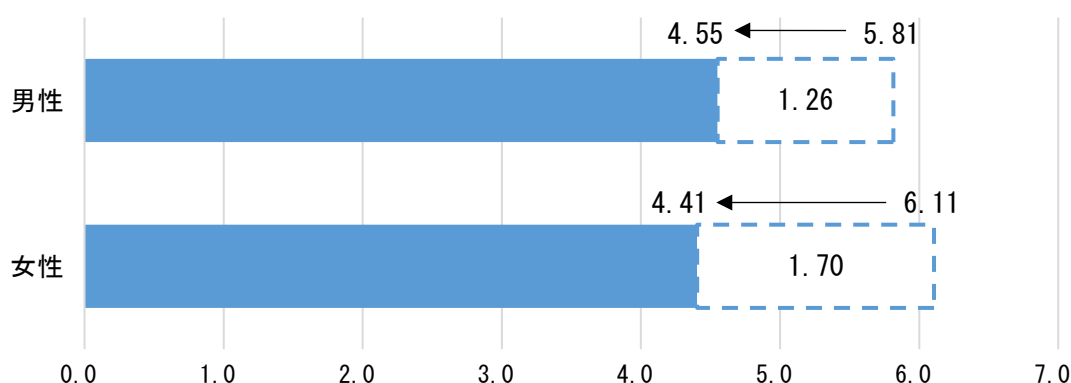
まず、我が国の満足度平均の概況を確認する。生活全体の満足度が 5.96 から 4.48 へと 1.48 減少したのに対して、仕事の満足度の低下幅はそれより小さく 1.03 であった。一方、生活の楽しさ・おもしろさの満足度の低下幅は 1.96、社会とのつながりの満足度の低下幅は 1.75 となり、生活全体の満足度と比べて低下幅が大きい。

生活の楽しさの満足度が低下した理由としては、例えば、自粛生活の中で、各種レジャーや外出といった外出機会が減少したこと等が考えられる。また、社会とのつながりの満足度が低下した理由¹⁴としては、友人・親戚や職場の同僚等との交流機会が減少したこと等が考えられる。

(女性の満足度の低下幅は男性より大きい)

満足度(生活全体)平均の変化を男女別に比較すると、女性は平均満足度が 1.70 低下しており、男性の 1.26 よりも低下幅が 0.44 大きくなっている。その理由は定かでは無いが、例えば、女性の方が友人との交流時間が長いこと、子供の学校休校など育児の環境変化の影響を受けやすいこと、非正規雇用の割合が男性より高いこと等が考えられる。

図表 2-1-2 感染拡大前後の総合主観満足度の変化

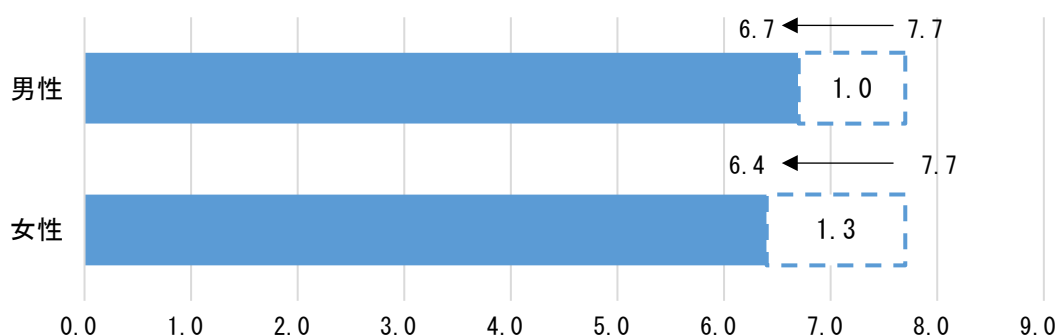


女性の満足度の低下幅が大きい傾向は、日本以外の国でも見られる。例えば英国では、女性の平均満足度の低下幅は 1.3 となっており、男性の満足度の低下幅 1.0 よりも大きい。なお、調査の時期・方法等が異なる¹⁵ため、日本の調査結果と海外の調査結果の直接比較はできないことに留意が必要である。

¹⁴ 社会とのつながりの満足度の低下については、第2節で詳しく分析する。

¹⁵ 英国では、感染症拡大前に実施した調査と、感染症影響下で実施した調査という2つ調査結果を比較している。日本では1度の調査で「感染症拡大前」と「感染症影響下」の満足度の両方を質問したため、影響下の満足度が低く出やすい可能性がある。

図表 2-1-3 英国の生活満足度の変化（男女別）



(出典) Simetrica-Jacobs and the London School of Economics and Political Science (2020)¹⁶

(高齢者の満足度が大きく低下する一方、若者の一定割合は満足度が上昇)

満足度(生活全体)の変化について年代別に見ると、60歳以上の満足度の低下幅が大きいことが分かる。感染症拡大前の通常期では、60歳以上、特に70歳以上の平均満足度は他の年代よりも高いが、感染症影響下においては、若者の満足度を下回る水準まで低下している。

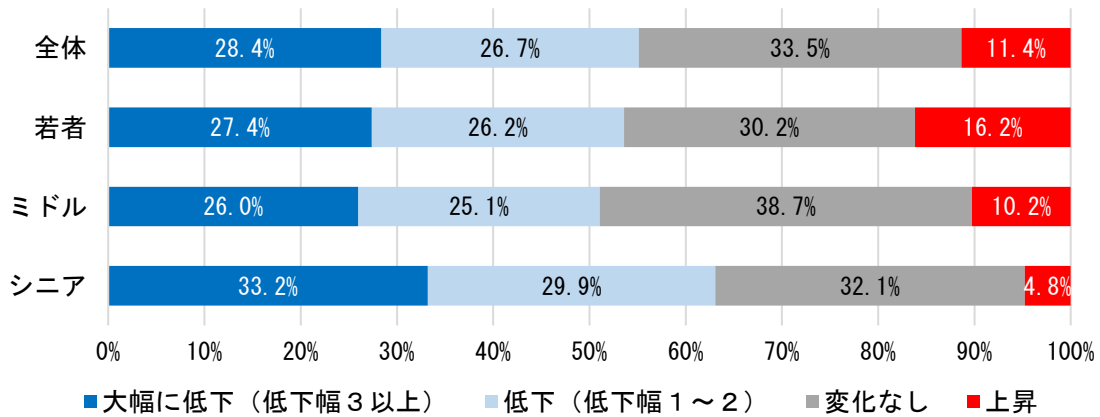
図表 2-1-4 年代別 満足度の変化

	拡大前	影響下	差
10 歳代	6.03	4.60	-1.43
20 歳代	5.94	4.69	-1.25
30 歳代	5.92	4.53	-1.39
40 歳代	5.61	4.35	-1.26
50 歳代	5.67	4.22	-1.44
60 歳代	6.30	4.45	-1.85
70 歳代以上	6.60	4.63	-1.97

以上のように、平均満足度で見ると、減少幅に違いはあるものの、どの年代でも満足度は低下傾向にある。では、感染症影響下において、すべての人の満足度が低下したかどうかを見てみよう。若者(30歳代以下)、ミドル(40～50歳代)、シニア(50歳代)の別で見ると、すべての年代で過半数の人の満足度が低下しており、特にシニアでは6割を超える。一方で、満足度が上昇した割合は少ないものの、シニアの4.8%に対して、若者の16.2%は満足度が上昇している。

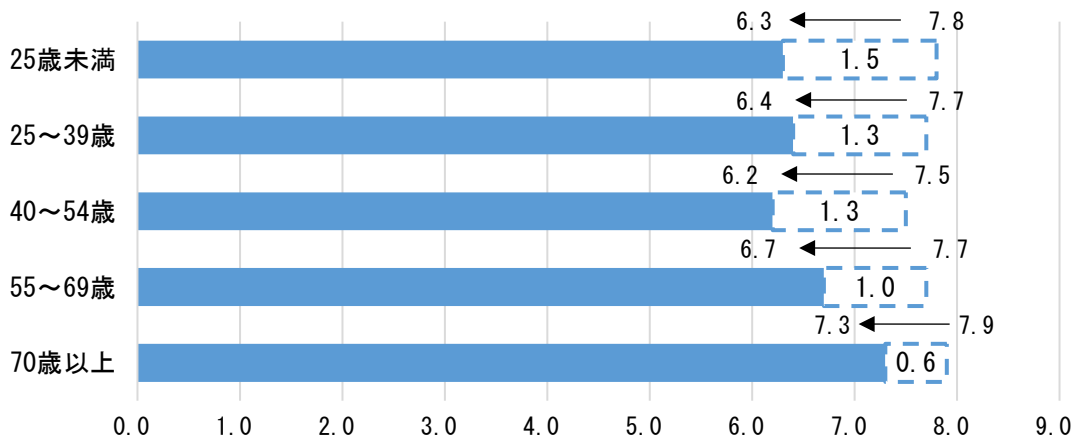
¹⁶ “The Well-being Costs of COVID-19 in the UK: Average levels of Life satisfaction by gender”

図表 2-1-5 満足度（生活全体）の変化【回答者割合】



以上のように、日本では高齢者の満足度の低下幅が最も大きい。一方で英国では、若者の平均満足度の低下幅が大きく、高齢者の満足度の低下幅は小さくなっており、日本とは傾向が異なる。

図表 2-1-6 英国の調査結果
(The Wellbeing Costs of COVID-19 in the UK)



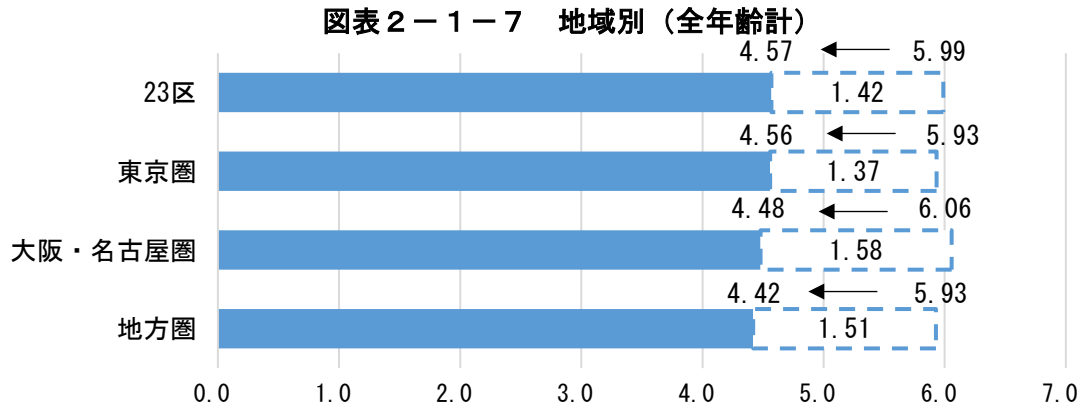
(出典) Simetrica-Jacobs and the London School of Economics and Political Science (2020)¹⁷

日本では感染症拡大前において、60歳以上のシニア層の満足度が、他の年代と比べて相当程度高い水準にあったことが、下落幅の大きさに関係している可能性もある。

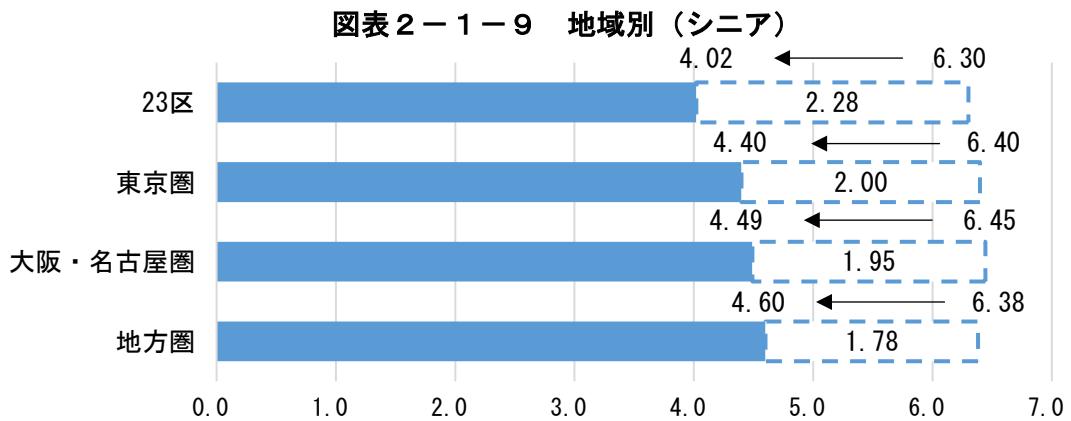
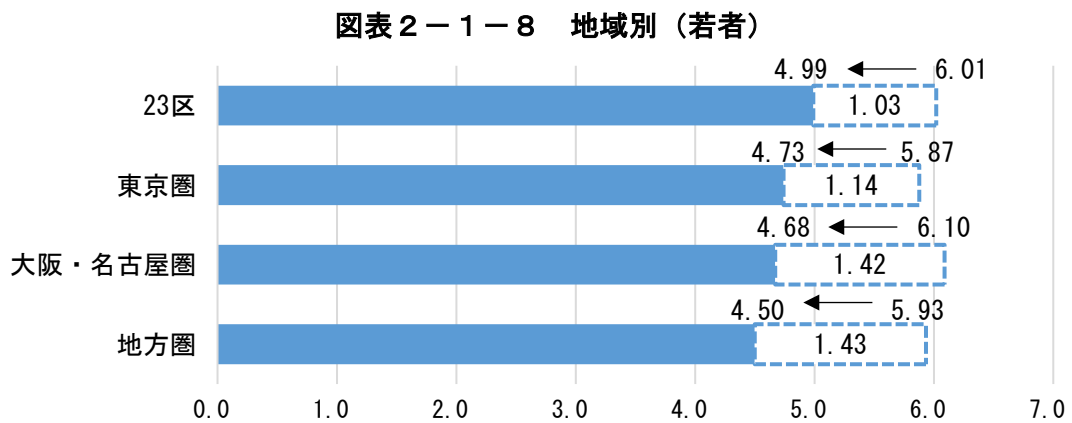
¹⁷ “The Well-being Costs of COVID-19 in the UK: Average levels of Life satisfaction by age group”

(23区では高齢者の満足度が低下し、地方圏では若者の満足度が低下)

平均満足度(生活全体)の変化を地域別に見ると、全年齢計では、地域別に大きな違いはみられない。



一方、年齢別と地域別のクロス分析をしてみると、地域別の傾向が見える。東京 23区では、他の地域と比べて若者の満足度の低下幅が小さい一方で、シニアの満足度の低下幅は他の地域よりも大きい。



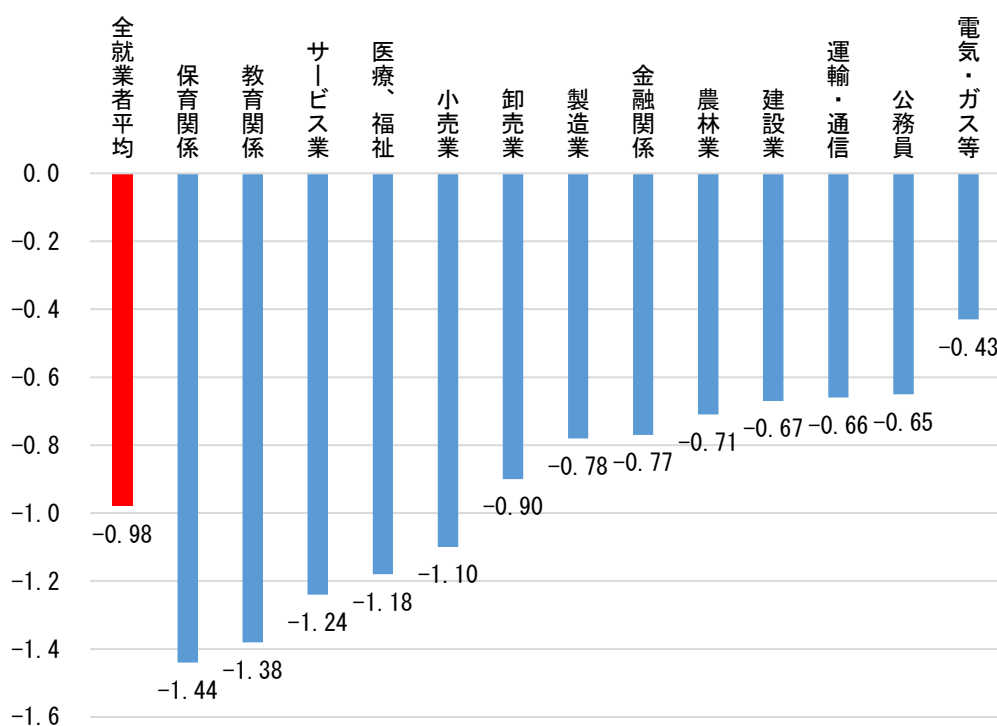
II with コロナの働き方の変化と満足度

感染症の影響によって、我が国の企業・団体の業務において変化が必要となった。対面サービスを提供する事業所の多くは休業や時短営業を実施。また、営業する場合にも、マスクやフェイスシールドの着用など感染症対策を実施した上で営業するため、従業員は従来にない対応が必要になった。こうした中で、就業者の仕事に対する満足度がどのように変化したのかを見ていく。

(保育、教育、サービス業、医療・福祉で仕事満足度が低下)

まず、仕事満足度(平均値)の低下幅について、産業分類別に見ていく。保育関係及び教育関係という子供と直接接することが多い産業において、最も仕事満足度の低下幅が大きくなっている。次に、サービス業、医療・福祉、小売業といった、テレワークがしにくい対面サービスを提供する産業が続いている。

図表 2-2-1 産業分類別の仕事満足度の低下幅



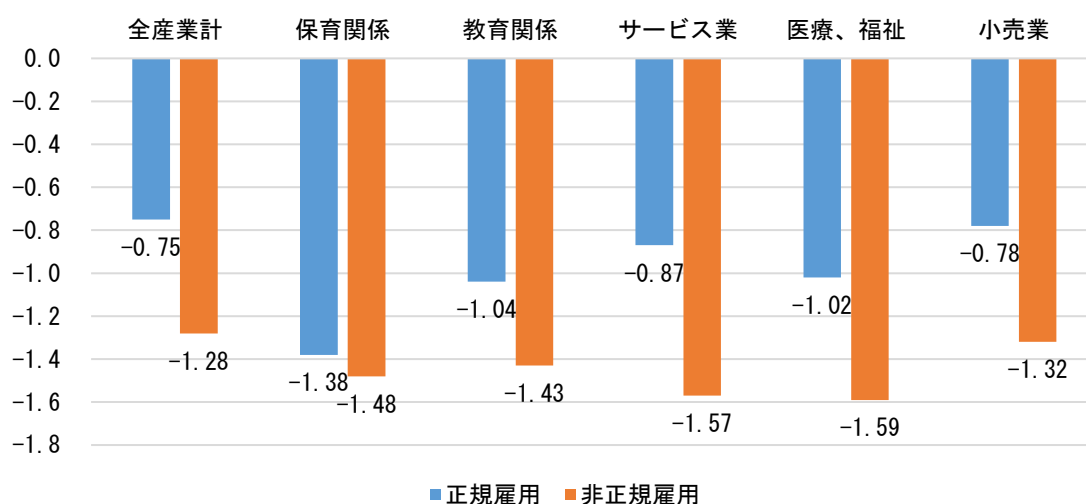
次に、雇用形態別(正規・非正規の別)に満足度の変化幅を見てみる。非正規雇用については仕事満足度の低下幅が 1.28 となっており、正規雇用の 0.75 よりも大きくなっている。

これを産業別に集計し、仕事満足度の低下幅の大きな5産業について見ると、最も満足度の低下幅の大きかった保育関係については、正規・非正規の低下幅が概ね同

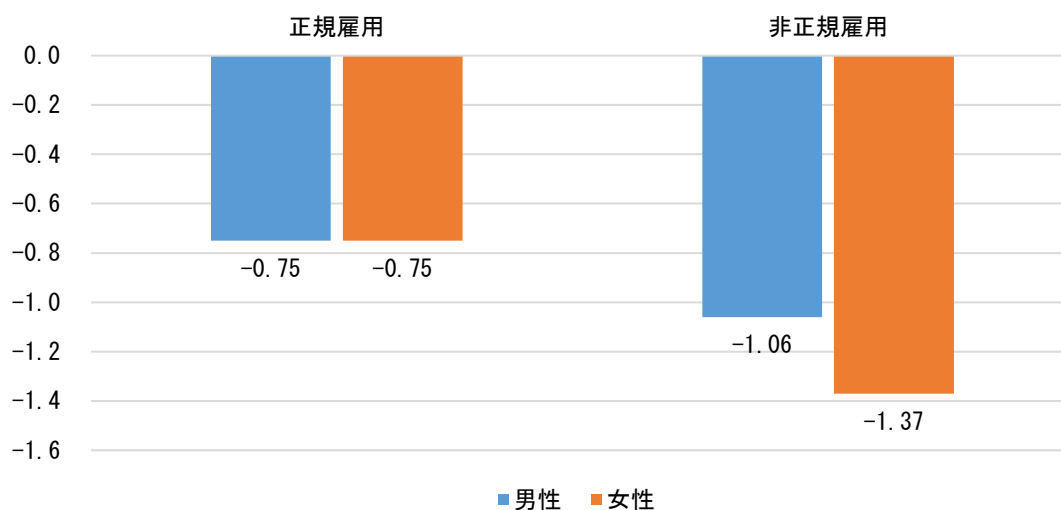
程度である。一方、正規・非正規の間の満足度の低下幅の差が大きいのが、サービス業(差が 0.70)、医療・福祉(差が 0.57)、小売業(差が 0.54)の3つである。これら3つの産業では、女性の非正規雇用の労働者が多く働いているため、女性の非正規雇用は、正規雇用や男性の非正規雇用と比べて満足度の低下幅が大きく、1.37 となっている。

今回の調査結果からは、非正規雇用の方が満足度の低下幅が大きい理由は明らかでない。例えば対面サービスに従事することが相対的に多く、これまでと違う環境でストレスを抱えがちなこと等の仮説が考えられるが、今後の検討課題である。

図表 2-2-2 雇用形態別の仕事満足度の低下幅



図表 2-2-3 男女別の仕事満足度の低下幅



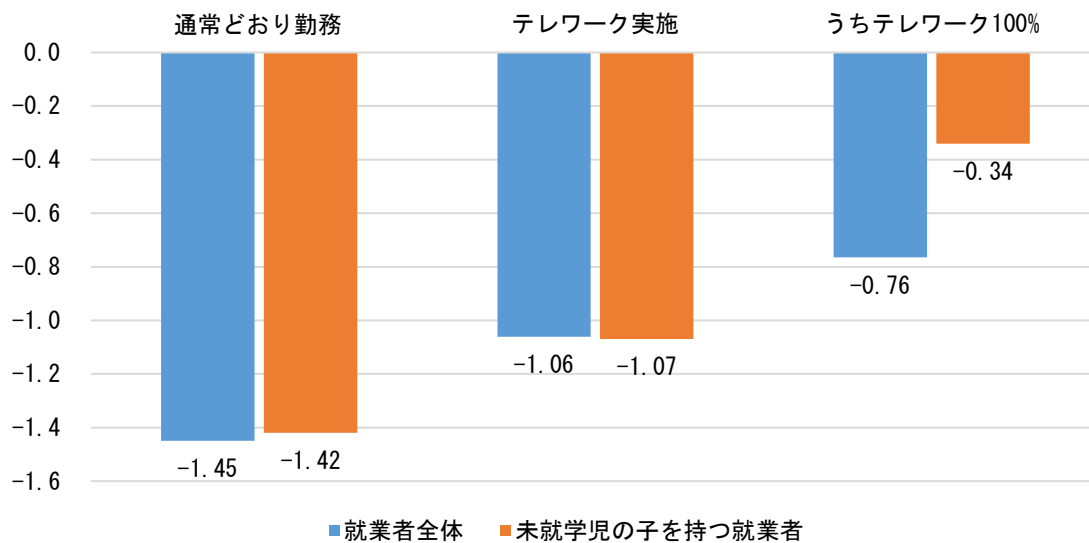
(テレワークは仕事満足度の低下幅を縮小)

感染症の影響によって、我が国でこれまで導入が十分に進んでこなかったテレワークが急速に普及した。例えば内閣府調査によれば、就業者の 33.4%がテレワークを経験し、うち東京 23 区の就業者は 55.5%がテレワークを経験した。こうしたテレワークの拡大によって、就業者の満足度にどのように影響したのかを分析する。

テレワークを実施した就業者の満足度の低下幅 1.06 となっており、通常どおり勤務した就業者の 1.45 よりも、低下幅が小さい。特にテレワーク実施率が 100%の就業者の満足度低下幅は 0.76 となり、通常どおり勤務の場合の約半分である。

また、未就学児の子供を持つ就業者が、テレワークを 100%で実施する場合、満足度低下幅は 0.34 となり、通常どおり勤務と比べかなり小さくなる。小さい子供を持つ親にとって、しっかりと家で子育てに向き合える 100%テレワークが実施できることは、生活満足度の改善にとって有意義であると考えられる。

図表 2-2-4 満足度（生活全体）平均値の低下幅

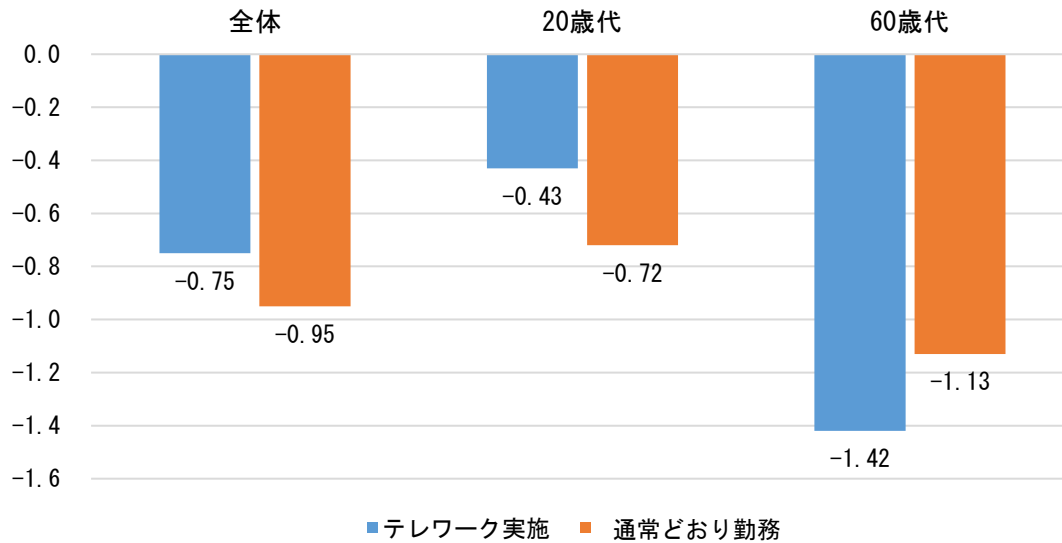


(60 歳代ではテレワークによって仕事満足度の低下幅が拡大)

次に、テレワークの普及に伴い、就業者の仕事の満足度にどのように変化したのかを見ていく。

就業者全体では、テレワーク実施者は仕事の満足度の低下幅が小さい傾向があり、プラスの効果を持つ。テレワークによるメリットとして、無駄な会議の見直しにつながることで、自分の仕事に集中できること等が指摘されている。こうした理由で、テレワーク実施者の仕事満足度の低下幅が縮小しているのではないかと考えられる。

図表 2-2-5 テレワークの実施の有無と仕事満足度の低下幅



テレワークと仕事満足度の関係を年代別に見ていく。20歳代においては、テレワーク実施者は通常どおり勤務した就業者よりも仕事満足度の低下幅が小さい。一方、60歳代では、テレワークを実施しなかった就業者の方が、満足度の低下幅が小さい。若者は新しい働き方であるテレワークに馴染みやすい一方、60歳代ではテレワークに馴染みづらい可能性が示唆される。

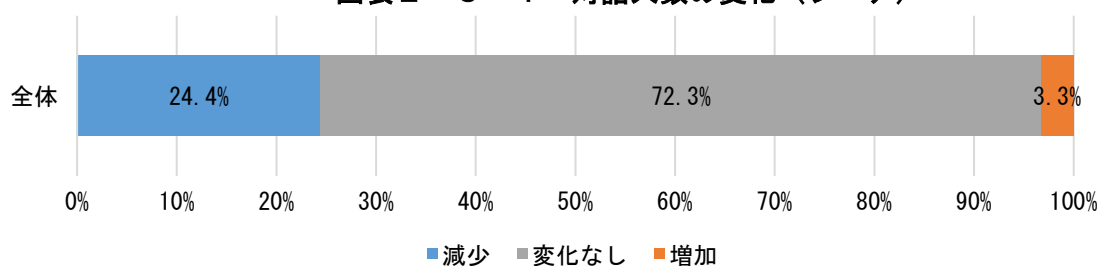
Ⅲ with コロナの暮らしの変化と満足度

(対話人数が減少したシニアは満足度が低下)

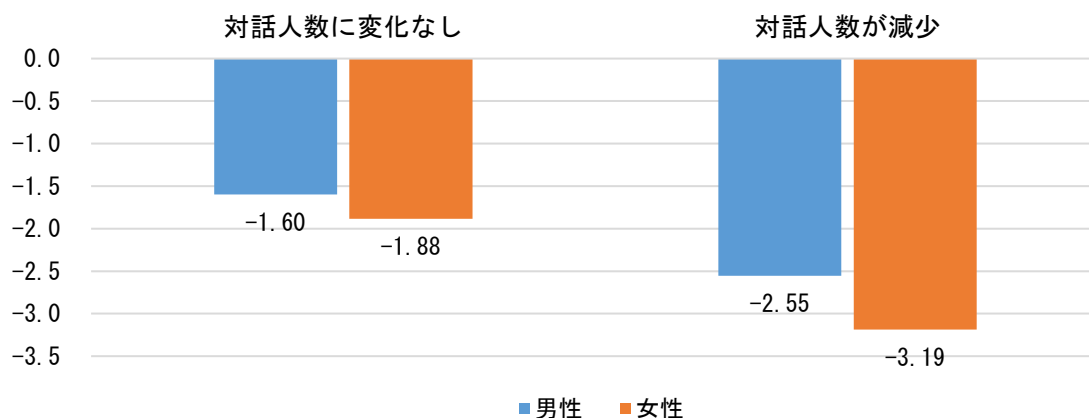
感染症が暮らしに与えた大きな影響の一つとして、自粛生活の中での社会とのつながりの縮小が挙げられる。特に、社会とのつながりの満足度の低下幅が大きかった 60 歳以上のシニアにおいて、どのような変化が生じているかをみる。

シニアの対話人数の変化を見ると、24.4%が感染症影響前と比較すると減少しており、対話人数に変化がない人よりも社会とのつながり満足度の低下幅が大きい。特に、対話人数が減少した女性の満足度の低下幅は 3.19 と大きくなっている。

図表 2-3-1 対話人数の変化 (シニア)



図表 2-3-2 社会とのつながりの満足度の低下幅 (シニア)

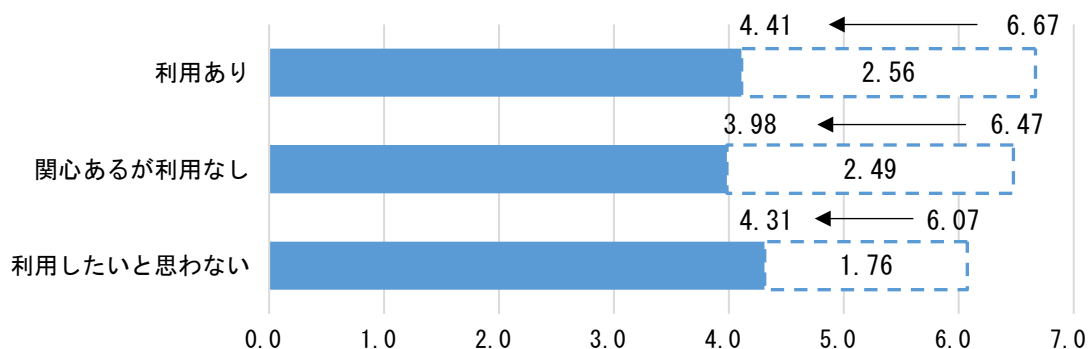


(ビデオ通話の経験、関心の程度と社会とのつながりの満足度)

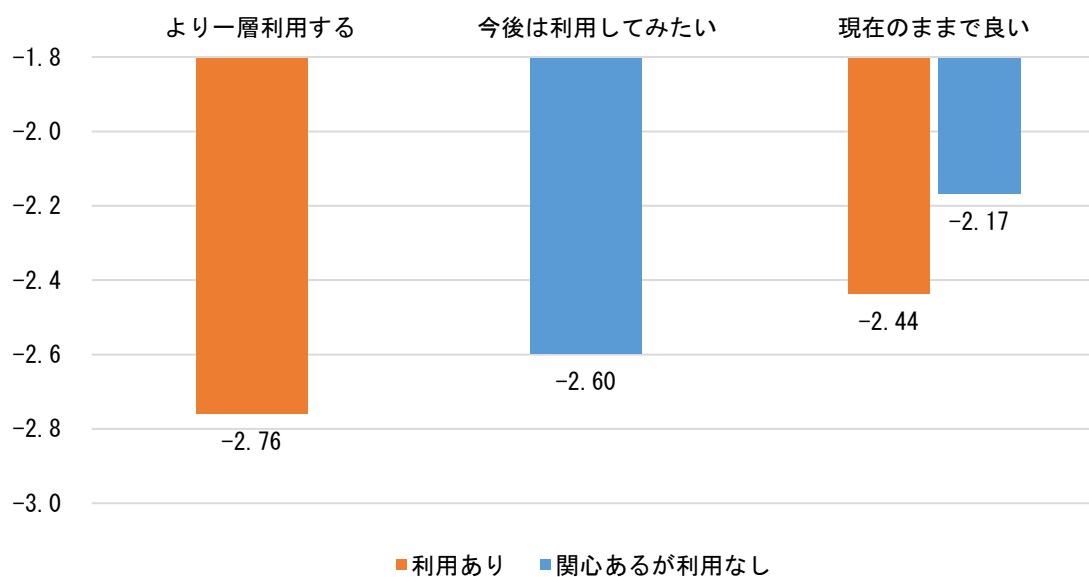
シニアのビデオ通話 (zoom、skype、Line 等) の経験、関心の程度と社会とのつながりの満足度を見ると、ビデオ通話の利用がある人は利用しない人よりも、感染症拡大前の社会とのつながり満足度が高いが、感染症の影響下においては低下幅が最も大きくなっている。さらに、今後のビデオ通話の利用について、より一層利用すると回答した人が最も満足度の低下幅が大きく、ビデオ通話への関心が高い人や利用者の方が

社会とのつながりをより重要視しているのではないかと考えられる。

図表 2-3-3 ビデオ通話の経験、関心の程度と社会とのつながり満足度の変化（シニア）



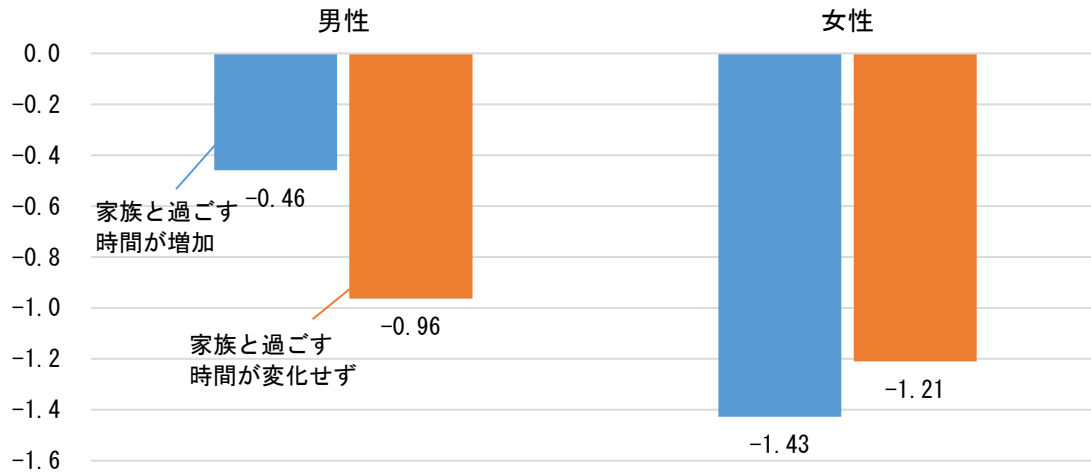
図表 2-3-4 今後のビデオ通話利用と社会とのつながり満足度の低下幅



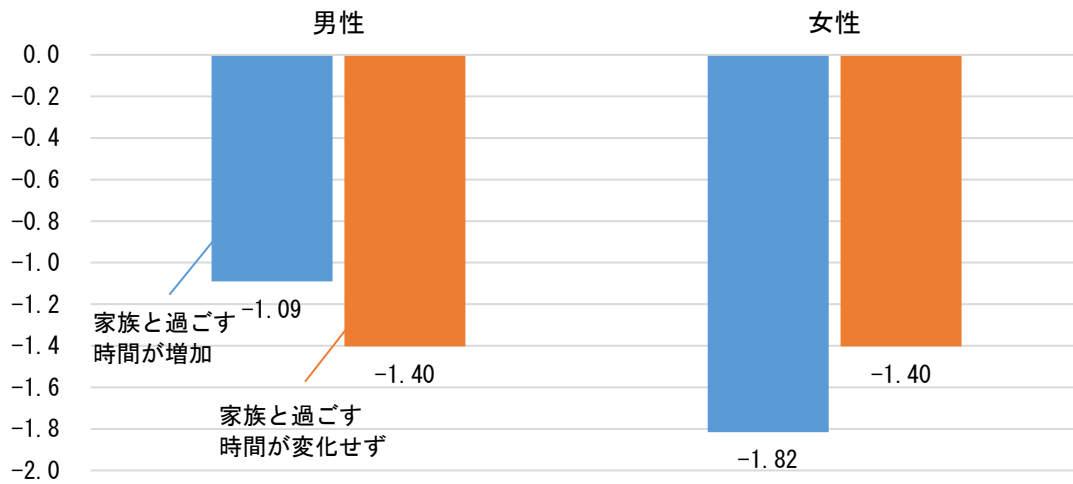
（家族と過ごす時間の増加は男性の子育て満足度を改善）

テレワーク等の働き方の変化や外出自粛等の感染症の影響により、子育て世帯の70.3%が家族と過ごす時間が増加した。家族と過ごした時間の増加と子育てのしやすさ満足度の関係を見ると、男女で異なる結果が見られる。男性の場合は家族と過ごす時間が増加した方が子育て満足度の低下幅が小さい。一方、女性では、家族と過ごす時間が増えた方が満足度の低下幅が大きくなっている。生活全体の満足度との関係においても、同様の傾向がみられる。

図表 2-3-5 家族と過ごす時間の変化と
子育てのしやすさ満足度の低下幅



図表 2-3-6 家族と過ごす時間の変化と
満足度（生活全体）の低下幅

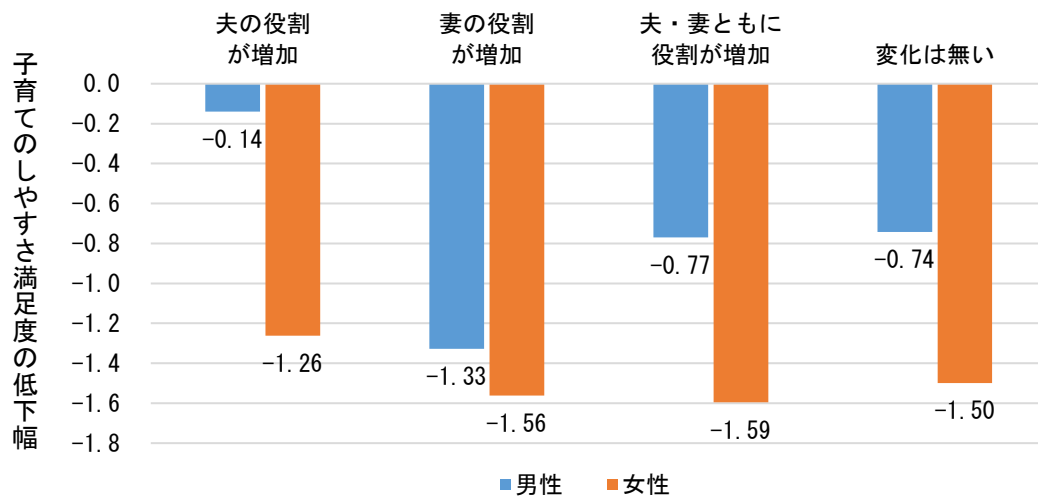


<コラム> 家事・育児の役割分担から見る子育て満足度

家族と過ごす時間の増加が子育て満足度に与える影響には大きな男女差が見られたが、その背景には夫婦間の家事・育児の役割分担の変化が及ぼす影響が大きいと考えられる。

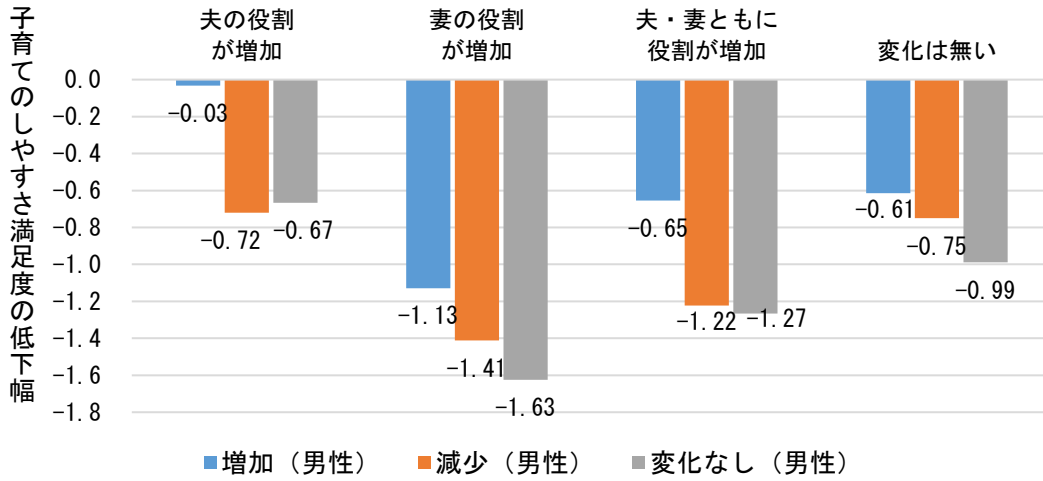
家事・育児に関する夫婦間の役割分担の変化と子育て満足度の関係を見ると、特に男性で自ら(夫)の役割が増加した場合、子育て満足度の低下幅は著しく小さい。一方、妻の役割が増加した男性の満足度の低下幅は大きく、感染症の影響下において、妻のみの負担が増加すると、男性の子育て満足度にもマイナスの効果が及ぶことが分かった。女性の場合については、男性と比較すると夫婦間の役割分担の変化が子育て満足度に与える影響は小さいが、夫の役割が増加した場合に最も低下幅が小さくなっている。

図表 2-3-7 家事・育児に関する夫婦間の役割分担の変化



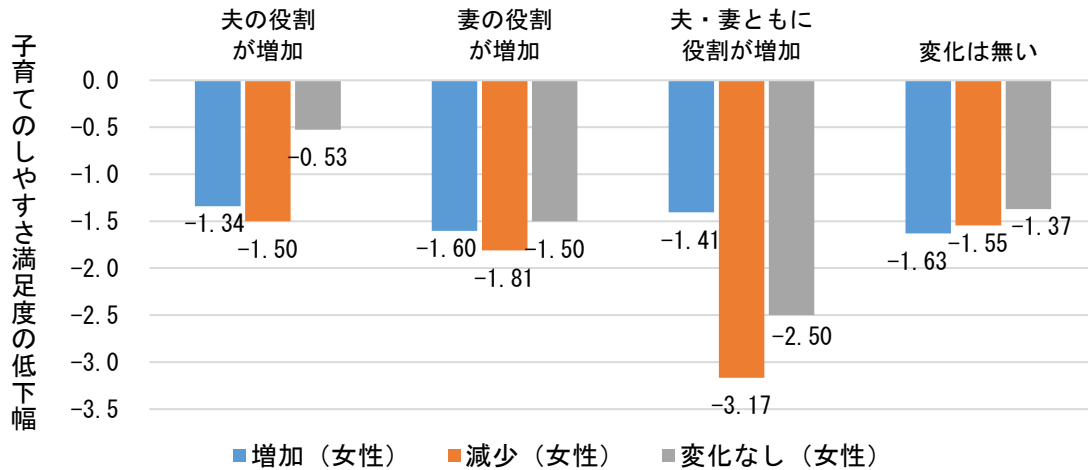
男性は、夫(自ら)の役割が増加すると、子育て満足度の低下幅は著しく小さくなるが、その中でも特に、家族と過ごす時間が増加した人の満足度の低下幅が著しく小さい。男性にとっては、家事・育児の役割分担の変化に関わらず、家族と過ごす時間の増加は子育て満足度にプラスの効果をもたらすが、特に夫の役割が増加した場合にその効果が大きくなる。

図表 2-3-8 夫婦間の役割分担の変化と
家族と過ごす時間の変化（男性）



女性においても、夫の役割が増加すると、子育て満足度の低下幅が小さくなる傾向にある。男性と比較すると、家族と過ごす時間や夫婦の役割分担の変化が与える影響は小さいが、夫の役割の増加は子育て満足度にプラスの効果をもたらす。

図表 2-3-9 夫婦間の役割分担の変化と
家族と過ごす時間の変化（女性）



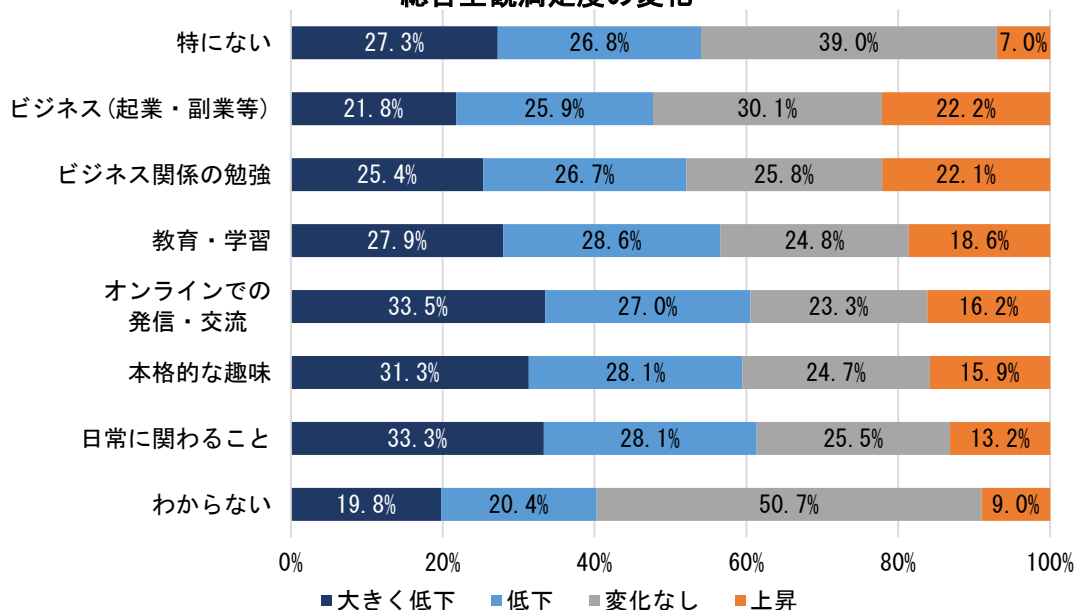
※夫の役割が増加: 夫の役割が増加・夫の役割がやや増加

妻の役割が増加: 妻の役割が増加・妻の役割がやや増加

(新たな挑戦をした人は、満足度が上昇した割合が高い)

自宅で過ごす時間が増加する中で、新たな挑戦・取組を行う人も多くみられる。新たな挑戦・取組を特に実施しなかった回答者の中で、満足度が上昇した割合は低く7.0%であるが、感染症を機にビジネス関係の取組・勉強に新たに挑戦した人の22%は満足度が上昇している。

**図表 2-3-10 新たな挑戦・取組を行った人の
総合主観満足度の変化**



(オンライン授業を受けている大学生は満足度が高い)

感染症の影響を踏まえ、多くの大学で授業が休止となったり、オンライン授業として再開されたりしている。大学生・大学院生の満足度(生活全体)を見ると、オンライン授業を受講していない学生と比べて、通常どおりの授業をオンライン授業で受講できた学生は、満足度の低下幅が小さいことが分かる。

**図表 2-3-11 大学生・大学院生のオンライン授業の受講と
満足度の低下幅**

